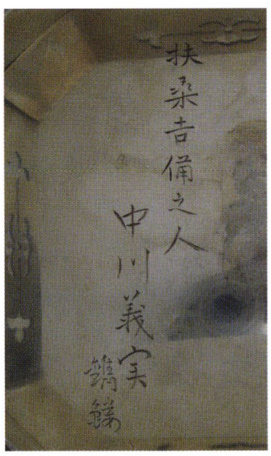

16　中川義實《神龍呈瑞置物》一点

明治三十三年（一九〇〇）
銀・金・赤銅・銅／高彫・象嵌
三三・〇×七四・〇×七一・五

尾を振り上げて四肢を踏ん張る巨大な龍が口から瑞雲を吹き出し、その瑞雲の上には鳳凰を頂き貴石を散りばめた楼閣が載るという、見るものをして圧倒せずにはおかない大型の置物である。細部の技工に凝りすぎてグロテスクに陥った金工製置物は、明治前期に製作された輸出製品に多く見受けられるが、そのような傾向はあくまでも外国向けの現象であり、国内に現存する作品は写実表現を極めても醜怪に感じられるものは少ない。その観点から見ると、穏やかにまとまることのない本作は題材、形状、技工の取り合わせにおいて、国内向けとはやや異質な性格を持ち、明治という時代が孕んだ過剰な造形感覚を現代に伝えている。

中川義實（一八五九～一九一五）は、岡山や京都で活躍した彫金家・正阿弥勝義（一八三一～一九〇八）の次男として生まれ、伯父である中川勝實（一八二九～七六）の養子となった。初め伯父のもとで彫金を学び、のち東京美術学校で加納夏雄に師事した。本作の楼閣部分に見られる多彩な色金を使用する彫金技法は、様々な形状の置物を得意とした実父の正阿弥勝義にも確認することができ、本作は中川が自らの家系の流儀を存分に発揮した作品であると言える。

また、本作付属の台は、上面に前田香雪の図案による波涛雲文綴錦を貼り、六角紫水（一八六七～一九五〇）が梨子地に海賦文様を蒔絵と螺鈿で表したもので、置物の龍に因んだ意匠が選択されている。なお、台に取り付けられた、藤唐草文を透彫した地に菊桐紋を付した金具を、加納夏雄の弟子で東京美術学校助教授を務めた岡部覺彌（一八七二～一九一八）が製作した。

本作は明治三十三年の皇太子御成婚を祝して内務省高等官一同より献上された品である。

楼閣部分

台金具：岡部覺彌

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治の彫金―海野勝珉とその周辺
三の丸尚蔵館展覧会図録No. 41

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成十八年九月二十三日発行

©2006, The Museum of the Imperial Collections